

施設のご案内

「田山花袋旧居」もあわせてご覧ください。
(道路北側・第二資料館内)



交通案内

田山花袋記念文学館 / 〒374-0018 館林市城町1番3号
TEL/FAX 0276-74-5100
館林市教育委員会文化振興課 / 〒374-0018 館林市城町3番1号
TEL 0276-74-4111, FAX 0276-74-4113
<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>

※小・中学生は無料です。
※毎月第一日曜日(家庭の日)、5月13日(花袋忌)、
10月28日(群馬県民の日)は無料です。

一般 (中学生以下を除く)	210円	100円
個人	210円	100円
団体(20人以上)	210円	100円

- ◆ 入館料
年末年始
(土曜日・日曜日・休日を除く)
- ◆ 休館日
休日の翌日
月曜日(休日を除く)
(入館は午後4時30分まで)
- ◆ 開館時間
午前9時～午後5時

利用のご案内



田山花袋記念文学館

Taniyama Katai Literature Museum

ふるさと

館林と田山花袋

田山花袋は、明治4年12月13日館林に生まれた。本名録弥。田山家は、旧館林藩主秋元家に仕え、江戸時代に山形より館林に移り住んだ。

花袋は一家して上京する明治19年まで館林で過ごした。館林東学校に学ぶかわら、旧館林藩儒者吉田陋軒に漢学を学び、この頃より漢詩文を雑誌に投稿するなど、文学に目覚めていく。

花袋は上京後、このふるさとでの生活を「ふる郷」「小さな鳩」「幼き頃のスケッチ」などに描いた。



少年時代の花袋(右端)



初版「ふる郷」



漢詩集「城沼四時雑詠」



自筆原稿「ふる郷」

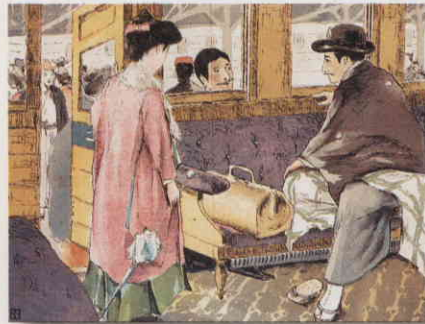
「幼き頃のスケッチ」より

私の大きくなった町は平野の中の
摺鉢の底のような処にあった。
……………(中略)
冬は赤城おろしが吹荒んで
日光連山の晴雪が
寒く街頭に光って見えた。

文学者花袋

田山花袋と文学

上京した花袋は、明治24年、尾崎紅葉を訪れ、小説家を志す。英語を学びながら西欧文学に触れた花袋は新しい文学を試み、明治40年「蒲団」の発表により、日本の自然主義の確立者として、近代文学界に大きな足跡を残した。続いて「生」「妻」「縁」の三部作や、「田舎教師」を発表。晩年には歴史小説や心境小説に取り組み、その一生を文学ひとすじに歩んだ。



「蒲団」口絵 小林鍾吉画 (明治40年9月「新小説」)



初版「田舎教師」



「田舎教師」口絵原画(岡田三郎助画)



花袋書簡
(岡田美知代宛)
「蒲団」発表後、そのモデルである岡田美知代への詫言を記す。



初版「妻」



初版「東京の三十年」



初版「百夜」

田山花袋略歴

- 明治 4(1871) 12月13日、田山鏑十郎・てつの次男として生まれる。
- 10(1877) 5歳 父鏑十郎西南戦争にて戦死。館林東学校に入学。
- 16(1883) 11歳 この頃から吉田陋軒に漢学を学びはじめる。
- 19(1886) 14歳 一家して上京。
- 22(1889) 17歳 この頃、松浦辰男に和歌を学ぶ。
- 24(1891) 19歳 尾崎紅葉を訪ねる。小説「瓜畑」を発表。
- 27(1894) 22歳 和歌を「文学界」に投稿。
- 29(1896) 24歳 この頃、島崎藤村・国木田独歩に出会う。
- 32(1899) 27歳 太田玉茗の妹りさと結婚。博文館に入社。
- 35(1902) 30歳 「重右衛門の最後」を発表。
- 37(1904) 32歳 日露戦争第二軍写真班員として従軍。
- 40(1907) 35歳 「蒲団」を発表し、自然主義文学の代表となる。
- 41(1908) 36歳 「生」「妻」を発表。
- 42(1909) 37歳 「田舎教師」を発表。
- 43(1910) 38歳 「縁」を発表。
- 大正元(1912) 40歳 博文館を退社。
- 5(1916) 44歳 「時は過ぎゆく」を発表。
- 6(1917) 45歳 「一兵卒の銃殺」「東京の三十年」を発表。
- 13(1924) 52歳 「源義朝」を発表。
- 昭和 5(1930) 58歳 5月13日没。東京多磨墓地に葬られる。
(年齢は、明治5年暦法改正を考慮し満年齢で換算)



文学者花袋

常設展示室



復元された書斎